

田中義廉編『小學讀本』卷一第一回に関する一考察

—『ウイルソン・リーダー』第1読本との比較を通して—

西本喜久子

(2008年10月2日受理)

A Study on the First Lesson of *Shogaku Tokuhon*: vol.1, Compiled by Yoshikado Tanaka
— On the comparative study of the Willson's First Reader —

Kikuko Nishimoto

Abstract: The purpose of this paper is to make clear the first lesson of *Shogaku Tokuhon*: vol.1, by Yoshikado Tanaka in 1873 of the Meiji period, had been based on fundamentally the first lesson in the Part II of the Willson's First Reader by Marcius Willson in 1860 in America. Through the comparative analysis of the two readers and lessons, I have reached the conclusion of this study and pointed out the place of the each lesson of the reader have had some similarity of the standpoint of having pupils' interest in or eagerness for the reading and studying of the continual lessons of the text-book after the reading the lesson. Nevertheless they had no any translation of the sentences of the Willson's Reader, they have succeed to gain the symbolic place of the lesson in the volume. This have so important meaning.

Key words: Yoshikado Tanaka, *Shogaku Tokuhon*, the Willson's Reader, the Early Meiji period

キーワード：田中義廉，小學讀本，ウイルソン・リーダー，明治初期

はじめに

田中義廉編『小學讀本』¹⁾は明治初期近代小学校で用いるべく編纂されたわが国の国語教科書の草分けであり、マーシャス・ウイルソン編 *Willson's Readers*²⁾ (以下、『ウイルソン・リーダー』) を原典としたことは周知のことである。同時期に編纂された榊原芳野 (1832-1881) らによる『小學讀本』に比しても田中義廉 (1841-1879) の編輯による『小學讀本』 (以下、『小學讀本』) はこれまで、明治初期文明開化期の思潮を象徴する「翻譯を基とする」読本であると評されてきた³⁾。

したがって、先行研究においては、主に『ウイルソン・リーダー』との教材内容の類似箇所や「一致度」が取り上げられてきた⁴⁾。この観点においては『小學讀本』巻一第一回が取り上げられることはない。この

第一回の本文は『ウイルソン・リーダー』第1読本の課業の「翻譯を基とする」ものではないからである。

上掲のような教材内容比較の観点の一方で、私たちが今後引き継ぐべき研究課題は、全国の近代小学校で用いる国語教科書の原形となった教科書のモデルが他にもない『ウイルソン・リーダー』であったことの史的意義とその受容過程の検証であろう。この探求の観点は淵源側と受容側の両者の比較にあると考える。

筆者は『小學讀本』のモデル性を検証するひとつの方途として、これまで、明らかにされていない『ウイルソン・リーダー』編纂に至るウイルソン (Willson, Marcius 1813-1905) の経歴や拠りどころとしたベスタロッチャー主義的教育観・教科書編纂者としての立場を明らかにし、米国における『ウイルソン・リーダー』の位置を追究することから始めた⁵⁾。明治初期近代学校教育開始期に『小學讀本』に課せられた使命に肉薄

するための手がかりのひとつを淵源側に求めてきた。

本稿では、その手がかりを、1873(明治6)年文部省編纂による『小學讀本』巻一第一回⁶⁾の構成と内容の分析に求める。

1. 研究の目的と方法

本研究の目的は『小學讀本』巻一第一回のモデルは基本的に『ウイルソン・リーダー』であることを明らかにし、第一回が巻一においてどのような位置づけに在るかを考察することである。

その追究の方法はまず、①『小學讀本』巻一(以下、巻一)と『ウイルソン・リーダー』第1読本(以下、第1読本)の構成の比較を通して巻一の枠組みから、第一回が第1読本第2部第1課の位置に相当するという仮説を立てる。その上で、②第一回の構成と内容の特色をモデル性の観点から検討する。このことにより、③『小學讀本』が『ウイルソン・リーダー』をモデルとして、どのように編纂されたかの一側面を明らかにしたい。最後に、④巻一における第一回の位置づけを考察し、明治初期国語教育構築へ向けてどのような第一歩が刻まれたかを考えたい。

なお、本稿で取り上げる中心的史料はウイルソン編『ウイルソン・リーダー』第1読本(HARPER'S SERIES. SCHOOL & FAMILY READERS. THE FIRST READER OF THE School and Family Series., 1860)⁷⁾と1873(明治6)年文部省編纂『小學讀本』巻一(同年5月師範學校彫刻本)である。1873年版として3月出版の師範學校彫刻本⁸⁾、同月刊若松縣翻刻本⁹⁾、出版月無記載の官許『小學讀本』長野縣反刻本¹⁰⁾を検討した。第一回に関しては本文、読点、挿絵には、木版翻刻による僅かな差異が認められるが、内容の読みに関しては差異のないことを確かめた。本稿では史料転載については印刷が鮮明であることにより唐澤富太郎蔵版・復刻版(1972)¹¹⁾を用いる。本文の引用に際しては変体仮名を現代仮名に、丁数を漢数字からアラビア数字に改めた。第1読本の引用は筆者の拙訳による。

2. 先行研究における第一回の位置づけ

現在のところ、巻一の成立と特色を明らかにした先行研究として「最も充実した」ものは、望月久貴著『明治初期国語教育の研究』(2007)¹²⁾である¹³⁾。同書により、第一回がどのように位置づけられているかを見てみよう。下線は筆者による。

「これを要するに、官板小学讀本は、総じて Willson's

Reader を模倣したと思われるけれども、機械的な直訳ではなく、かなり自主的な編集の面をも認めることができる。たとえば、巻之一、第一回は、格別に Willson's Reader との関連を持たないで編集された。」(p.264)

このように、第一回は『ウイルソン・リーダー』とは「格別に」「関連を持たない」「自主的な編集」の例と位置づけられている。

また、上掲書では、第一回内容については、本文の2丁表4行目「幼稚のときは、先づ日用の道具の名を覚え」から3丁表最終行「総て、野菜は、葉と根を、食物となす、又、實を食物とす」までを取り上げ、このように「庶物を列挙」することが「問答教材に適しており、明らかに Object-teaching の手引きとなっている」(p.265)との見解を示す。つまり、第一回本文の一部に「庶物を列挙」していることをして「問答教材」的特色が見られるとの認識を示した。これは、明治初期わが国における問答学習指導の理解を示す指摘である。しかし、これはウイルソンの構想する Object Teaching (または Object Lessons) 教育体系における読本内容とは隔たりが見られる¹⁴⁾。

まず、始めに両読本の全構成の比較を通して、「自主的編集」とされる、第一回の位置について考えてみよう。

3. 『小學讀本』巻一における第一回の位置

(1) 『ウイルソン・リーダー』第1読本と構成の比較を通して

第一回の位置を見るために、巻一の構成を表1として次に示す。

アラビア数字は筆者による。『小學讀本』巻一は「第一回」から「第七回」までの区分がされている。が、各回では課業題目名が記されているわけではない。課業の区分とその数については、原典である第1読本の課業内容との比較検討により筆者が数えたものである。第一回はその内容から便宜的に5課業とした。

表1. 『小學讀本』巻一の構成

1	第一回	(5課業)	-----	1
2	第二回	(9課業)	-----	5
3	第三回	(10課業)	-----	9
4	第四回	(11課業)	-----	16
5	第五回	(12課業)	-----	19
6	第六回	(10課業)	-----	25
7	第七回	(12課業)	-----	29
				(丁数)

このように、『小學讀本』は第一回から第七回までの7部構成であり、第一回を5課業（5丁表5行目まで）とすると合計69課業（38丁表5行目まで）からなる。全課業に占める第一回の課業数の割合は、およそ7.2%であるが、その内容量の割合は全課業のおよそ11.4%である。他の回と比べると全課業の中でも内容量の占める割合が大きい。学習始めの課業に対する比重の大きさは、位置づけにも反映すると考えられる。

次に、第1読本の構成を以下に表2として掲げる。本巻にも目次が記載されていないため、構成表は筆者作成による。アラビア数字と括弧内の記述も筆者による。課業数は LESSON で示されたものを数えた。

表2. 『ウイルソン・リーダー』第1読本の構成

1 教師への指示	2
2 第1部(1)〈A-Zの語を用いた3.4つの文;26課業〉	3
(2)書くことの学習〈A-Zの語で始まる文〉	8
(3)教師への指示	9
(4)綴り字の学習	10
3 第2部 4文字以下の易しい言葉 (14課業)	11
4 第3部 5文字以下の易しい言葉 (16課業)	21
5 第4部 時に6文字の言葉を含み、2つまたは3つのシラブルからなる易しい言葉を少し (32課業)	36
6 第5部 (14課業)	69
7 かけ算一覧表	84
	(頁数)

このように、第1読本は、始めの1「教師への指示」、終わりの7「かけ算一覧表」をひとつに数えると7部構成になる。第1部は第1読本の学習の基礎的準備段階として基本文字（アルファベット）学習が用意されている。挿絵を重要な手がかりとしながら単語法・簡単な文章法による読みの学習をする。教師の問いかけを聞き、挿絵を見ながら考え、読む（答える）ことと書くことの練習学習が行われる。この基礎学習の準備を経て、第2部以下の本格的な読みの学習に進む。

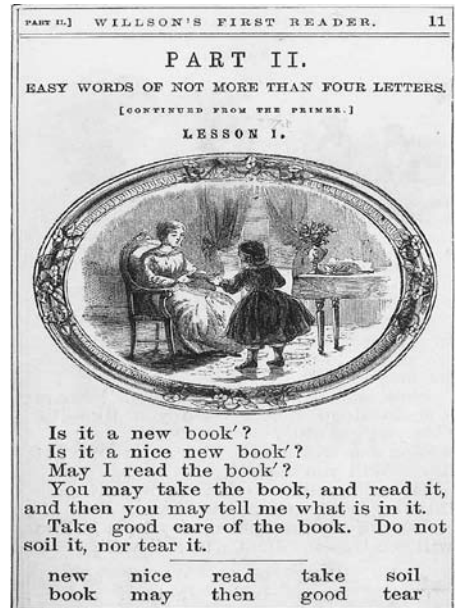
これまでの先行研究においては、すべて、第二回から第七回までの課業は、第1読本の第2部第2課以降の課業の本文と挿絵をモデルとして編纂したとされてきた。が、課業の順次性を見ると、巻一は第2部第1課以降をモデルに編纂されたと見るのが自然ではないだろうか。そこに何らかのモデル性を認めることはできないのだろうか。そこで、筆者は、第一回は第1読本の第2部第1課をモデルとして編纂されたという仮説を立ててみた。

第一回を第1読本第2部第1課と比較することにより、以下、その根拠の探究を試みたい。

(2) 『ウイルソン・リーダー』第1読本第2部第1課との内容の比較を通して

① 第1読本第2部第1課の内容と構成の特色

まず、第1読本第2部第1課（p.11）を次に掲げる。



F1. 『ウイルソン・リーダー』第1読本第2部第1課 (p.11)

第1読本の第2部第1課は上掲のように少女と若い女性教師、あるいは母親との会話（問答）により展開する。少女は学習者である子どもの象徴である。内容の構成は、①始めの少女の発する3つの問いの文、②それに答える教師の3つの平叙文の2部からなる。

挿絵を手がかりに内容を見てみよう。①では、教師の持つ新しい本に対する興味を示し、その本を読みたいという、少女の期待と意欲が示される。そこで②では、教師が新しい本（教科書）を学ぶ方法・内容を指南する。この時、教師が話す学習方法・内容とは、本を読んで何が書かれていたかを教師（あるいは母）に話すことである。最後に、丁寧に本を取り扱うことを注意して語り終わる。

読み手（聞き手）である学習者は、挿絵の少女に身を寄せ一体化して、これから始まる自身の学習に対する期待感を抱き、心構えをすることであろう。

本課は、少女が「それは新しい本ですか？素敵な本ですか？この本を読んでもいいですか？」と大人である教師へ問いを発することから展開する。筆者はこの点に着目する。学習者は教師の問いかけに答えたり、教師の言葉を聞くだけの存在ではない。自ら問う存在

として描かれている。ここにウイルソンの構想する問答学習の第一歩が読本で実現したことがわかる。挿絵を学習の場や読み進めの重要な手がかりとしながら、日常生活で行われる会話により問答の実際の学習が行われる。

この課業は第2部から始まる本格的な読本学習の最初に位置する。学習者の学習に対する意欲を喚起し、その心構えを養うという基本的な内容と構成上の位置づけが示されている。

②巻一第一回の内容と構成の特色

次に、第一回（1丁表～5丁表）を見てみよう。ここでは便宜的にその構成を内容のまとまりから、第1課「世界に居住する五種の人」、第2課「学校の稽古」、第3課「小學校で學文を習う」、第4課「賢き人と愚かなるもの」、第5課「学校の遊歩の時間」の5部とした。課業題目は筆者に拠るもので、出来る限り本文中の表現を用いるよう試みた。

以下、順次第1課から第5課までをF2.～F6.として掲げ、それぞれの教材内容の特色をモデル性の観点から見ていこう。

〈第1課「世界に居住する五種の人」〉



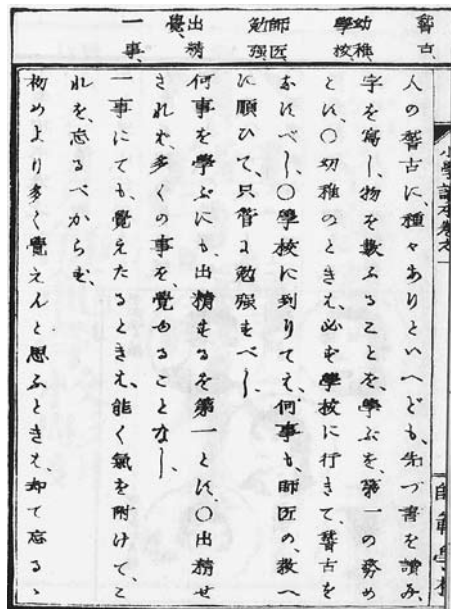
F2. 第1課「世界に居住する五種の人」 (1丁表)

まず、目を惹くのは「凡世界に、居住する人に、五種あり、」で始まる文章とその挿絵である。現代の私たちはいささか唐突の感を覚える。が、この挿絵は明治初期に最も読まれたという福澤諭吉纂輯『西洋事情』（1871）巻之一¹⁵⁾の目次「西洋事情目録」の前に掲げ

られた「四海一家五族兄弟」の口絵とはほぼ同じである。異なるのは、アジア人種として辮髪（べんぱつ）の清国人を描いたと思われる挿絵が第一回では洋髪（やうぱつ）の日本人を思わせるものに変更され、その位置が右上に変更されていることである。この『西洋事情』の初版本刊行は1866（慶應2）年であるが、この五つの「人種」を示す口絵は、阿部泰蔵譯『小學地理問答』（1874）¹⁶⁾の挿絵（巻一9丁裏）と同一である。同書の「凡例」には「此書ハ英吉利亞墨利加ノ小學校ニテ用フル地理書ノ輯譯セシノニテ」（3丁表）とある。このことより、『西洋事情』には英米の小學校で用いられていた地理の教科書に掲載された、世界の五つの人種を示す挿絵が転載された可能性が極めて高い。

しかも、同書の右上の『「コーカシヤン」人種』である「歐羅巴人種」の位置に『小學讀本』では日本人と思われる挿絵を置き替え、左上の『「マレー」人種』である「蒙古人種」の位置に「歐羅巴人種」の挿絵を置いている。最終文では「日本人は、亞細亞人種の中なり、」と日本人の位置を明示する。挿絵の位置からも、文明開化をしたわが日本人が「亞細亞人種」の代表、世界を代表する「人種」となるように学べとの編纂者の願いが込められた内容構成である。広く世界的視野を持ち学べとの意欲づけを意図した展開であることが、本文と挿絵のモデルの成り立ちから認められる。第1丁はこのように同時代の英米の地理教科書や『西洋事情』の一部を参考に構成されたことがわかる。

〈第2課「学校の稽古」〉



F3. 第2課「学校の稽古」 (1丁裏)

衣笠箱女 裳物庫	算盤	寫筆 日用	日 日用	自然 息々
-------------	----	----------	---------	----------

幼稚のとき、先づ日用の道具の名を覚え、其用の方を知るべし。○筆、字を寫し、又、画を寫し、道具ふり、○算盤、物を數ふ、道具ふり、○文庫、書物を、入る、箱ふり、○筆筒、裳ふり、入る、器ふり、



こと多く、故に少し充覚え、一事をも忘れず、日々怠りなく、習ふとき、自然と、多くの事を覚ゆべし。

鶏鳥獸 肉肉肉	炊田 知	豆粟稷 黍粟麥	種穀物 米穀物	食平 物生
------------	---------	------------	------------	----------

又、平生食するもの、名を覚えて、これを拵へ、食物とふい仕方を、知るべし。○食物とふまべきものに、種々あり、第一、穀物ふり、○穀物と、米、黍、豆、粟、稷、黍の類ふり、○此品は、皆田又と畑に作りて、其實を、取り、炊きて、食物とふし、或は、焼きて、食物とふし、第二、肉類ふり、○肉類と、獸肉、鳥肉、魚肉の類ふり、○此品も、焼きて、食物とふし、又、煮て、食物とふし、



F3. 第2課「學校の稽古」
(2丁表~2丁裏)

このように、F3. 1丁裏から始まる「學校の稽古」に関する内容は3丁表まで続く。紙面の都合により、3丁表は略す。本課は、第一回の中で最も分量が多い。「幼稚の時は、必ず學校に行きて、稽古をなすべし」として子どもに対する學校教育の勧めから始まり、學校での学習内容と方法について概要を説く。学習を「稽古」と言い、教師を「師匠」と呼ぶなど、江戸期の名

残が見られる。が、それゆえに学制頒布(1872.8)後の慌ただしさの中で近代學校で用いる教科書を準備した時代の息づかいがうかがえる。

以下、この第2課の引用文中のルビは山本尹中著『小學讀本字引全』(1874.12)¹⁷⁾に拠ることを記しておく。

まず、本課始めに、学習内容は①「書を読み」②「字を寫し」③「物を數ふること」であると述べる。この基本柱には、寺子屋學習にその典型が見られる。

続いて、學習方法は、「師匠の、教えに、順ひて、只管に勉強すべし」とある。「多くの事を覺」えることに「出精」し、その後は「能く氣を付けて、これを、忘るべからず、」である。そのためには「少し充覚え」「日々怠りなく習ふ」よう努めることが勧められる。

さて、具体的に何を覚えるのかについては、「幼稚のときは」まず、①「日用の道具の名」と「その用い方」。始めに掲げた「稽古」に用いる道具を例示し、「書物を入る、箱」に付け加えて、「筆筒」を「衣裳などを、入る、器」とする。次に②「平生食するもの名」と「これを拵へ食物となす仕方」が挙げられている。食物の種類として「第一」に「穀物」、 「第二」に「肉類」、 「第三」に「菓物」、 「第四」に「野菜の類」である。これらは挿絵に反映しており、①日用品の道具の例示は2丁表に、また②食物の例示は、2丁裏と3丁表に本文下に穀類と野菜が掲げられている。

本課は、読本の第一回であるので、まず子どもの身の回りの日常生活の中から、学びの道具を第一に掲げ、次に子どもに最も関心のある食物についての知識を習得させようとしたことがわかる。近代學校教育開始期に子どもの学習の必要と生活の関心に基ついた日常生活から、まず例示教材文が選ばれたことがわかる。

このように、本課では、書を読むこと・写すこと・數えることという江戸期の人々が生きて働くために生活で必要とした読み・書き・算盤の基礎学力の育成を重要なこととして説く。それを支えて学びを發展させるのは、教師の教えに従い記憶に努めることであった。

本課の内容に関しては、一部を、貝原篤信(晩年の号は益軒、1630-1714)の『和俗童子訓』(1710)に見ることができる。卷之一「総論」上では「四民ともに」「聖經を讀ましめ、仁義の道理をようやくさとさしむべし。是根本をつとむる也。次にものかき、算數を習はしむべし」¹⁸⁾と述べる。武士階級では數を數えることが軽く見られていた江戸期に、米穀、金銀、人馬などの「算數は」「是日用の切要なる事」であると言う¹⁹⁾。この3つが寺子屋での基礎学力となり、「學校」で「勉強すべし」となったことに関しては、明治という時代が、貝原篤信の教育観に近づいたと言えようか。

また、「日々」少しずつ、繰り返し「自然と」記憶

することの大切さと其の理由・目的・内容・方法は、同じく『和俗童子訓』巻之三「讀書法」に同様の箇所が認められる²⁰⁾。とくに、本課1丁裏第2文段から2丁表第3行目にわたる3つの文段は、同書を念頭において構成された可能性が極めて高い。江戸期の代表的な子どもの学びの指導観と方法が継承され示されていることがわかる。

このように見ると、本課の構成は内容的には次の3つのまとまりからなる。それぞれの内容のモデルの可能性を次のように示しておこう。①第1文段（5行）は「學校」を「寺子屋」に置き換えると、江戸期の手習いの勧めの移行とも読み取れる。②続く第2～第4文段（8行）は、上掲の『和俗童子訓』の「讀書法」から。③終わりの第3丁表最終行までの「覚える」内容の例示は望月氏の示唆と同様に明治初年のわが国における Object Lessons の理解による Object（実物）の例を示したものと考えられる。

〈第3課「小學校に入りて一般の學文を習う」〉

本課業は次の本文の第1～第2文段である。

賢世 愚問	小 學 校	一學幼別工士 般文年々商農
ども、皆如雅のときより、學校に入りて、能く勉強	凡世間の人々に、賢きものと思ふものあれ	八の勢めと、拙々にて、士、農、工、商とも、皆別々の學
	皆習ふべき、學文を、教ふる所あり。	文あり、されども、幼年のとき、習ふべき學文と、み
	故に、人々、六七歳に至れば、皆小學校に入りて、一	ふ同しことなり、これを、一般の學文といふ、こと
	般の學文を、習ふべし。○小學校を、士、農、工、商とも	の學文を、習ふべし、何れの業をも、學ぶこと、能
	せむ。	

F4. 第3課業「小學校に入りて一般の學文を習う」
(第3課, 3丁裏第2文段, 8行目まで)

この第3課（3丁裏第1行から第8行目までの2文段）も、第2課同様に子どもの学習について述べた課業である。

本課を第3課として、前課と別にしたのは、「一般の學文」というキー・ワードである。それを「幼年のとき、習ふべき學文は、みな同じこと」として用いている。つまり、江戸期の士農工商いかなる立場の子

どもでもそれぞれの学びの基礎基本となる共通学習を意味する。したがって、「人は、六七歳に、至れば、皆小學校に入りて、一般の學文を、習うべし」と言う。

ところで、モデル性に関して見るならば、本文中の「學文」は『論語』巻之一の「學而第一」の次の箇所に見出す事ができる²¹⁾。

「子弟弟子入則孝出則弟謹而信汎愛衆而親仁行有餘力則以學文」（出典の本文のみ、筆者注）

この「學而第一」について、高橋敏は著書『江戸の教育力』（2007）で次のように言う²²⁾。

『『論語』のなかで、寺子屋師匠の多くに受容され、コンセンサスともなったのは、學而第一から「余力學文」の四文字に集約された教訓であった。

一中略一寺子屋師匠は百姓町人の子どもが「學文」、読み書きを学ぶことを正当化してくれる金科玉条を探し求めていた。彼らは孔子が若者に「學文」を強く勧めていることに着目した。内で親に孝、兄弟仲良く、外で行いが信と仁であるという条件を満たせば、「余力」すなわち余裕あるときは本を読み、学問してもよいことになる。「余力學文」の「學文」を重視する思潮が民間に流布、普及し、親の教育熱を刺激し、寺子屋の隆盛につながった一面も無視できない。」

江戸期の藩学校、郷学校、漢学塾だけでなく、このように寺子屋でも『論語』の学びを通して、「學文」は汎く親しまれた言葉であった。それゆえに、本課最終行で、「小學校は、士、農、工、商とも皆習ふべき、學文を、教ふる所なり、」というの当時のわが国の教育の実際から感覚的に隔たりのないことがわかる。

「學文」とは「本を読み、学問」することである。「文」に相当するもののひとつが、近代小學校においては、この『小學讀本』ということになる。

前課同様に本課でも、単に何を「学ぶ」か、その内容が問われているだけではないことは、同課業の基本的概念のモデルと推測される『和俗童子訓』、「學而第一」からも明らかであろう。わが国で受容した儒学に基づく人としての基本的倫理観が、実生活においても基本的教育観として在ることがわかる。

続く、次の第4課（F4.に掲げた3丁裏の第3文段からF5.の4丁表6行までの第1文段）も、本課同様に子どもの学習に関する課業である。

〈第4課「賢き人と愚かなるもの」〉

本課を第4課として、前課を区別するキー・ワードは「賢き人（もの）と愚かなるもの」と「勉強」である。前丁第3文段から以下の丁の前文段を見てみよう。



F6. 第5課「遊歩の時間」

(以上、第5課、4丁表第2文段～5丁表第1文段)

に野球遊びの挿絵が描かれ、本文には「少年たちは球で遊ぶ」と在る (p.15)。

一方、「輪」(a hoop)を持つのは3つの課で、少女の挿絵が描かれている (p.27, p.30, p.45)。これは第一回とは異なる。

「遊歩場」とは the play ground の訳出であろう。これが登場するのは、『ウイルソン・リーダー』第2読本第1部第6課 (pp.12-13) である。課業題目も THE PLAY-GROUND である。ここには、右に単級学校を思わせる校舎の入り口が描かれ、一人の少年が輪を廻して遊び、他の二人の少年が上にボールを投げて遊ぶ挿絵が描かれている。少女のばあいは年長の子が年少の子と手をつないでいる。また、『ウイルソン・リーダー』第2読本では運動場で遊ぶのは放課後である。が、第一回では、「学校にありて稽古をするもの」には「勉強」と「遊歩」の「時間」が設定されている。

このように「遊歩」の時間の設定、子どもの遊びの内容に少し差異が見られるが、本課は『ウイルソン・リーダー』第2読本の課業を参考に内容を構成したようである。「男児」の凧遊びは第2読本 (p.12) では描かれていない。が、第1読本第2部第3課 (p.13) に凧を揚げて遊ぶ少年の挿絵が描かれている。これを第2読本の課業の挿絵と組み合わせると、本課の本文と挿絵を構成したことがわかる。

以上、第一回をその内容のまとめりやキー・ワード

を手がかりに5つの課業に分け、それぞれの内容と構成の成り立ちと特色をモデル性の観点から考察した。

この5つの区分は筆者による便宜的なものである。もっとも大きく区分すると、①「世界における日本人の立場」(第1課)と②「学校生活」(第2課～第5課)の2つになる。また、①「世界における日本人の立場」、②「学校での学び」、③「学校での遊歩の時間」の3つに区分してもよい。

では、これまでの考察に基づき、巻一における第一回の位置づけについて次にまとめてみよう。

4. 『小學讀本』巻一における第一回の位置づけについて

以上、考察したように第一回は、課業本文の内容から見ると次の順で5つの学びの意欲づけと学びへの心がまえを準備させるという構成を示している。①世界の五人種を代表する民族としての日本人となるよう、世界に目を開かせる。②学校では教師の教えに順い、読み・書き・算を始め「出精」して繰り返し勉強する大切さを説く。③小学校では皆に共通の基礎的一般的学習をすることを理解させる。④怠りなく何度も復習し知識を得て賢い人になるように説く。⑤学校では遊歩の時間を楽しみ、さらに勉強に励むようにさせる。

これらは、前節で示したように、英米の同時代で用いられている地理の教科書の一部、米国で用いられている読本の一部、明治初期に外国の文明を紹介した名著、江戸期に人々の学びを支え、なお明治初期藩学校・寺子屋などで汎く用いられた教科書、江戸期の学びをささえた儒学者の名著にうかがえる教育観、などをそれぞれ参考にして、課業を構成し、編纂されたことを明らかにした。わが国で経験の及ばない学校生活については米国の読本から一部を併せて編纂している。

これらは総て、読本学習の始めの第一回にあたり、学んで賢い人となることを目的として、怠りなく学校で学ぶことを説く。ただ、学ぶことを精励するだけで

なく、第1読本・第2読本から内容の一部を取り入れながら、遊ぶ楽しみも掲げている。近代小学校で学ぶことへの意欲づけとするためである。

このようにとらえると、第一回は読本学習において、第1読本の第2部第1課をモデルとして、本を読み学習することの意欲づけをし、心がまえをさせるという、位置づけにおいて、本文・挿し絵を構成して編纂された課業であると言うことが出来る。内容は第1読本の該当箇所の訳出を参考に編纂されていないけれども、第1・第2読本の一部も参考に編纂されている。

おわりに

『ウイルソン・リーダー』をモデル読本としつつ、『小學讀本』がどのように新しい近代教育の一步を築こうとしたか。わが国の第一歩は、ウイルソンの構想するペスタロッチー主義的教育観を展開させるのではなく、江戸期から学校教育に伝統的に継承された儒学に基づく教育観を基盤として、少しずつ時代の新たな要素を取り入れながら緩やかに踏み出そうとしたことがわかる。聞くこと・記憶することが理解力と思考力を育成する基礎学力である、とするわが国にとり、第1読本のように教師に自ら問いを発する子どもが描かれていたことは驚きに値したことであろう。儒学的教育観と発言する(聞く)ことを通して思考力を育成する経験を重んじる教育観とのひとつの邂逅であった。

【注】

- 1) 『小學讀本』(1873)は先行研究において「田中義廉編」とされてきた。これに対し望月氏は「無記名初版本」の存在をして田中以外の編輯者の可能性を指摘する(本注12, pp.366-367)。その慎重な研究姿勢に敬意を表する。が、堺縣反刻本巻二(1873.3)・巻三(1873.5)には第1丁に「田中義廉編輯」の明刻が見られる。同反刻本巻一は現段階では未だ所在が確認できていないが、巻一もまた田中義廉編輯である可能性が高い。堺縣反刻本の底本である師範学校彫刻本『小學讀本』も田中義廉編輯である可能性の高いことから、本稿においては、1873年3月刊行『小學讀本』を田中義廉編と記した次第である。現在のところ、望月氏の指摘のように、1873年刊『小學讀本』に田中義廉編輯と明刻された巻一は見いだせていない。今後調査をさらに続けたい。
- 2) 管見によれば『ウイルソン・リーダー』シリーズは1860年代、1870年代のハーパー社版、1880年代のリッピンコット社版がある。田中義廉編『小學讀本』

の原典には、1860代に刊行された初版本シリーズが用いられた。このことに関しては第110回全国大学国語教育学会(2006.5, 岩手大学)の自由研究口頭発表資料にて示した。

- 3) 仲新『近代教科書の成立』教育名著叢書①, 日本図書センター, 1981.4.20(初版1949.7.31), p.408。また、海後宗臣・仲新編纂『日本教科書大系』近代編第四巻国語(一)には「この当時は(明治初年を指す、筆者)文明開化の時代ではあり、その一般思潮を反映して、田中本の方が多く使用されていたので、これが小学読本を代表していた。」(講談社, 1964.1.30, p.711)と言う。
- 4) 近年の高木まさき論文「ウイルソン・リーダーから田中義廉編『小学読本』へ」(『横浜国大国語教育研究』第26号, 2007.6, pp.1-46)では、『ウイルソン・リーダー』と1874年8月改正『小學讀本』との本文と挿し絵の「一致度」を取り上げている。
- 5) この点に関しては次の拙稿をご参照いただきたい。
 - ・「19世紀アメリカにおける『ウイルソン・リーダー』の革新的要素と位置づけ—『マクガフィー・リーダー』との比較を中心に—」(『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部(文化教育開発関連領域)第56号, 2007.12.28, pp.131-140)
 - ・「1860年代のアメリカにおける『ウイルソン・リーダー』(HARPER'S SERIES, *School and Family Readers*.)の一評価—Harper's *School and Family Series of Standard Text-books*.(1864)のばあい—」(全国大学国語教育学会編『国語科教育』第63集, 2008.3.31, pp.51-58)
- 6) 文部省編纂『小學讀本』は1873(明治6)年3月に師範学校彫刻本として巻一が出版された。同月には早くも若松縣翻刻本が出版されている。以降同一年に出版された師範学校彫刻本も各縣反刻本も同様に題箋には『小學讀本一』、見返しには『小學讀本巻一』、本文最初の頁の一丁表第一回には「小學讀本巻之一」と明刻されている。本稿では、表記については、右に掲げる見返しのように『小學讀本巻一』に基づいた。本史料は唐澤富太郎蔵版(本注11)。
- 7) WILLSON, MARCIUS, *HARPER'S SERIES, SCHOOL & FAMILY READERS., THE FIRST READER OF THE SCHOOL AND FAMILY SERIES.*, New York: HARPER & BROTHERS.



1860, 84p, 家蔵。

- 8) 文部省編纂『小學讀本』卷一, 明治6年3月, 師範學校彫刻本は, 古田東朔編著『小學讀本便覽』第一卷(武蔵書院, 1978.12.25, pp.108-127)に「宮内庁書陵部蔵」「小學讀本(田中義廉編)」(p.107)として表紙から全38丁裏まで見ることができる。
- 9) 文部省編纂『小學讀本』卷一, 明治6年3月, 師範學校彫刻, 若松縣翻刻, 東京大学附属図書館蔵。
- 10) 文部省編纂『官許小學讀本』卷一, 明治6年, 師範學校彫刻, 長野縣翻刻, 東京学芸大学附属図書館蔵。
- 11) 文部省編纂『小學讀本』卷一, 明治6年5月, 師範學校彫刻, 1972.6.26, 唐澤富太郎蔵版, 大日本印刷(株)製本・印刷。
- 12) 望月久貴『明治初期国語教育の研究』, 溪水社, 2007.2.10, 583p。本書は同名の学位取得論文を野地潤家氏, 浜本純逸・宏子氏らのご尽力により出版された。なお, 同研究の前書は、『国語科論集5 国語科教育史の基本問題』(学芸図書, 1984.9.20, 270p)。
- 13) 本注4で掲げた論文で, 高木氏も望月氏の研究(1984, 本注12)について「拙稿(2003)でも紹介したが, 最も充実した先行研究である」(p.1)と評す。
- 14) ウイルソンの構想した Object Teaching (あるいは Object Lessons) については, 第114回全国大学国語教育学会(2008.6.1, 茨城大学)の自由研究口頭発表において取り上げた。稿を改めて考察したい。
- 15) 福澤諭吉纂輯『西洋事情』卷之一, 尚古堂發兌, 1870(明治3年庚午初夏), 全56丁。本書は慶應義塾出版局から明治3年から5年にかけて刊行された第二版, 国立国会図書館蔵。近代デジタルライブラリー, ダウンロード:2006.12.21。なお, 同書は『小學讀本』以前の「上等小学第八級(現在の小学5年前期)」で「讀本」科の教科書のひとつにあげられている(古田東朔『教科書から見た, 明治初期の言語・文字の教育』国語シリーズ36, 文部省, 1957.9.20, pp.43-44)。
- 16) 阿部泰蔵譯『小學地理問答』卷一, (明治7年甲戌1月上梓)の9丁裏に次の左の挿絵が掲載されている。右の挿絵は, 本注15, 卷之一の目次「西洋事情目録」の前頁に掲載された「四海一家五族兄弟」の口絵である。『小學地理問答』の「凡例」には同

書が「英吉利亞墨利加」の「小學校」で用いられている「地理書」と記されている。下の比較から、『西洋事情』口絵は『小學地理問答』の挿絵と同じ典拠の可能性が高い。『小學地理問答』は家蔵。



(『小學地理問答』, 9丁表) (『西洋事情』の口絵)

- 17) 山本尹中著『小學讀本字引全』, 東京書肆六書房合梓, 1874.12, 全17丁。家蔵。奥付には, 官許明治七戌第十二月, 發兌書肆として, 廣瀬新兵衛以下5名が並刻されている。
- 18) 貝原益軒著・石川謙校訂「和俗人童子訓」卷之一総論上, 『養生訓・和俗人童子訓』, 岩波文庫, 第24刷, 1982.11.10, 岩波書店, p.220。石川氏は, 同書を「わが国における最初のまとまった教育論書である, といってもさしつかえない」(p.295)と言う。
- 19) 同上, pp.220-221
- 20) 同上, 卷之三「読書法」, pp.244-253
- 21) 「論語卷之一 學而第一」, 『新刻改正 論語 後藤點一』, 2丁表一裏。本書は, 後藤先生定點 學習館『四書』全十冊(佐土原藩蔵版, 明治3年新刻)の一冊。家蔵。
- 22) 高橋敏『江戸の教育力』, ちくま新書692, 筑摩書房, 2007.12.10, p.143-144
- 23) 福澤諭吉・小幡篤次郎同著『學問のすゝめ』(初篇)慶應義塾出版局版, 明治4年未12月『新選名著複製全集 近代文学館』, ほるぶ, 1980.10.20, pp.2-4, 引用に際しては変体仮名を現代仮名に改め, 句読点を加えた。なお, 全篇は, 福沢諭吉著, 伊藤正雄校注『學問のすゝめ』(講談社学術文庫1756, 2006.4.10, 344p)で読むことができる。
- 24) 本資料で引用した『實語教』は石川佳子『福岡県前原市端梅寺に残された寺子屋の教科書』下(社会福祉法人福岡コロニー, 2006.4.18, p.140)による。
(主任指導教員 吉田裕久)